東京大学　グレーター東大塾　平成28年度秋期受講生募集要項

1. 塾生対象者
本テーマに関連する専門領域を有する法人派遣者及び本テーマに関心の強い法人ならびに個人

2. 定員：30名

3. 参加費：20万円（税込）

4. 選考方法
書類審査によって入塾を決定します。応募者多数の場合は専門分野のバランスを考慮し、事務局で選考いたします。入塾をお断りすることもありますので、ご了承ください。

5. 出願方法と出願期間
（1）出願方法　参加申込は東京大学ホームページより「グレーター東大塾」を検索し、申込書をダウンロードして、必要事項をご記入の上メールにてお送りください。送り先は申込書に記載しています。
（2）締切り日　2016 年 8 月 19 日(金)（応募状況によっては締切りを早める場合があります。）

6. 審査・選考結果発表
- 書類審査の結果は、2016年 8 月 23 日(火)までにメールにて通知いたします。
- 選考結果通知後に参加を辞退する場合は、速やかに申し出てください。

7. 開講式、修了証書授与式
当塾は開講式（9/7）と修了証書授与式（11/30）を行います。時間は 18：00 開始、場所は本郷キャンパス山上会館地階（御殿）。

8. 参加費の納付
受講が確定した塾生に、参加費納付関連の書類、請求書を郵送いたしますので請求書に記載の期限までに納付願います。

9. 個人情報の取り扱い及び注意事項
- 提出された書類は、いかなる事情があっても返却には応じられません。
- 出願により知り得た氏名、住所、その他個人情報については、参加者選考、選考結果発表、入塾手続き業務を行うために利用します。また、同個人情報は、入塾者の教務関係や受講料徴収に関わる業務を行うために利用します。上記各種業務は、一部を本学より受託業者に委託して行うことがあり、受託業者に対して、委託した業務を遂行するために必要となる限度で、知り得た個人情報の全部又は一部を提供する場合があります。
- 講義録を取りまとめて出版する場合があります。
- 本募集要項の記載内容は変更される場合があります。

お問合せ、お申込先
東京大学卒業生室内・グレーター東大塾事務局　プログラムオフィサー：綿貫 敏行／藍原 秀夫
〒113-8654　東京都文京区本郷 7-3-1
TEL：03-5841-1210　FAX：03-5841-1054　E-mail：gtj@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

参加塾生総数 300名

開催実績		講座名	塾長
6	H25年秋	「中進国時代の中国を読み解く」	東京大学大学院法学政治学研究科教授 高原 明生
7	H26年春	「超高齢社会日本を支える医療技術と社会システム」	東京大学大学院工学系研究科マテリアル工学専攻教授 片岡 一則 東京大学大学院薬学系研究科 ファーマコビジネス・イノベーション教室特任教授 木村 廣道
8	H26年秋	「ロシアはどこへ行くのか～共生の道をさぐる」	東京大学名誉教授 塩川 伸明
9	H27年春	「持続可能な社会のための水システムイノベーション」	東京大学大学院工学系研究科教授 古米 弘明
10	H27年秋	「飛躍するアフリカと新たなる視座」	東京大学大学院総合文化研究科教授 遠藤　貢
11	H28年春	「「水素社会」から日本のエネルギーの未来を考える」	東京大学教養学部附属教養教育高度化機構 環境エネルギー科学特別部門教授 瀬川 浩司

（塾長の肩書は開催当時）

イスラームとどう付き合うか ── グローバル化する社会と宗教の深層

総論１
イスラームの深層──ムスリムの思想や行動に底流するもの

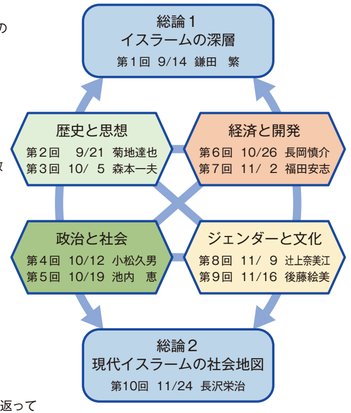
歴史と思想
対立と共存の思想史 ── イスラームの「正統」と「異端」
聖なる血統 ── 世界に広がる預言者ムハンマドの一族

政治と社会
宗教復興のダイナミズム ── 近現代中央アジアの政治と宗教
「イスラーム国」の衝撃 ── 終末論とジハード

経済と開発
イスラーム経済から資本主義の未来を読み解く
湾岸産油国のサバイバル ── ポスト石油時代と開発戦略

ジェンダーと文化
イスラームとジェンダー ── 湾岸地域を中心に
変容する宗教文化 ── 聖典解釈とムスリム・ファッション

総論２
現代イスラームの社会地図 ── アラブ革命の五年間を振り返って



平成28年度秋期受講生募集

グレーター東大塾 12

テーマ　『イスラームとどう付き合うか ──グローバル化する社会と宗教の深層』

会　場／東京大学本郷キャンパス伊藤国際学術研究センター

塾長：
東京大学東洋文化研究所　教授
長沢 栄治

イスラーム

グレーター東大塾
グレーターとは、在学教育を拡大して卒業生や社会人を対象とすることから名付けています。先端専門性の高いテーマをピックアップして、課題に精通する第一線教授陣を長とする、「塾」形式で開講します。

東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO
卒業生室
社会連携部

ご挨拶

古谷　研（東京大学 理事・副学長）

グレーター東大塾は、先端専門性に焦点を置き、現実社会の身近なテーマを取り上げて、塾長となる教授の指導のもとに展開するユニークなものです。一般教養の講義というレベルを超えて、大学と社会が連携して第一線の課題に取り組み、問題解決のネットワークを構築する、それが本プログラムの目的です。

グレーター東大塾の概要

監修
グレーター東大塾企画委員会 委員長　野城 智也（東京大学 教授）

場　所	東京大学本郷キャンパス内
時　間	平日夜、18時〜20時半
期　間	半期、10コマ
規　模	クラス30名程度
参加費	20〜30万円前後（プログラムにより異なる）

特　色
- 先端・専門性の高い現代社会的テーマ
- 塾長の個性を尊重した多種多様なプログラム
- 外部講師も含めた実践的内容
- 受講生参加による共同研究・政策提言なども視野

塾長　長沢 栄治 教授

〈プロフィール〉
東洋文化研究所・教授。1976年東京大学経済学部卒業、アジア経済研究所勤務。1981-83年アジア経済研究所海外派遣員としてカイロ大学文学部大学院にて在外研究。1995年東京大学東洋文化研究所助教授、98年同教授。1998-99年日本学術振興会カイロ研究連絡センター長。2002-05年東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター主任、2013-16年同副センター長。2008-09年、2013-14年東洋文化研究所副所長。2009-11年日本中東学会会長。専門は、中東地域研究・近代エジプト社会経済史。2015年度までは「アラブ革命と中東政治の構造変容」、2016年度からは「イスラーム・ジェンダー学の構築」の科研費プロジェクトを組織。主な著書：『アラブ革命の遺産』（平凡社、2012年）、『エジプトの自画像』（平凡社、2013年）、『中東と日本の針路』（共著：大月書店、2016年）。

副塾長　後藤 絵美 准教授

〈プロフィール〉
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク・特任准教授、東洋文化研究所・准教授。2008年東京大学総合文化研究科博士課程満期退学（2011年博士［学術］取得）。日本学術振興会特別研究員（2008-11年）、東洋文化研究所助教（2013-15年）を経て現職（2015年10月-）。2012年より東京大学教養学部で現代イスラームに関する講義を受け持つ。1997年イラン・テヘランに語学留学、2003-5年エジプトのカイロ・アメリカ大学ジェンダー・女性研究所で研究員として在外研究を行う。専門は、現代イスラーム思想・文化、アジア地域文化史。主著『神のためにまとうヴェール――現代エジプトの女性とイスラーム』（中央公論新社、2014年）、『「近代」に生きた女性たち』（『世界史のなかの女性たち』勉誠出版、2015年）、『イスラーム国家における「シャリーア」と「自由」』（『現代のイスラーム法』成文堂、2016年）。

イスラームとどう付き合うか
――グローバル化する社会と宗教の深層

塾長：東京大学東洋文化研究所　教授　**長沢 栄治**

現在、世界人口73億人のうち、約16億人がムスリム（イスラーム教徒）だといわれています。人口に占めるムスリムの割合が多く、その政治的・社会的影響力がとくに強い地域は、東南アジアや中東、アフリカの一帯です。日本国内のムスリム人口は、全人口の0.1％以下（約11万人）と決して多くはありませんが、経済成長が著しい東南アジアや、エネルギー資源の供給地である中東・アフリカ地域との関係が深まるにつれて、ビジネスや観光による人の行き来や、相互交流の機会が増えています。一方、イスラームの名を冠した集団による暴力行為やテロ活動が世界各地で起こり、人々を震撼させているという現状もあります。グローバル化が進むなか、日本に暮らす人々にとっても、「イスラーム」とよばれるものをどう理解し、それとどう付き合っていくのかは、重要かつ危急の課題の一つとなっています。

本講義は、イスラームにまつわる表面的・技術的な知識の習得だけでなく、最新の研究成果をもとに、さらに一歩踏み込んで、その深層部分に関する理解を目指すものです。イスラームとは、アラビア語で「神に帰依し、その教えに従う」という意味だとされますが、何が「神の教え」なのか、何をすることが「神に帰依すること」なのかという問いの答えは、人々が置かれた状況によって変わってくることがあります。本講義では、「歴史と思想」「政治と社会」「経済と開発」「ジェンダーと文化」をキーワードに、イスラームをめぐるダイナミズムを眺めていきます。過去から現在まで、異なる状況のなかでどのような姿でイスラームが立ちあらわれ、人々の思考や行動、国家や社会のあり方に影響を与えてきたのか。今後、何が起こり得て、それにどのように対処しうるのか。こうした疑問を講師陣と受講生の皆さんとで共に考えていきます。本講義は、長期に亘ってイスラームやムスリムと付き合うために必要な知見と経験を提供するものです。どうぞご期待ください。

■ 平成28年度秋期　グレーター東大塾　講座予定

講義時間：90分（講義）＋60分（質疑応答）　18:00〜20:30

開催日	講座名・内容	講師
9月14日(水)	**第1回 イスラームの深層：ムスリムの思想や行動に底流するもの** 日本人が皆同じ考え方をしているわけではないように、「日本人」という枠よりもはるかに多様な「ムスリム」が全て同じ考え方をしているわけはない。しかし、イスラームという価値観を共有するという一点で、濃淡は様々であるがイスラーム性をそこに見出すことができると言っていいだろう。別の言い方をすれば、それは神の啓示を真実であると考える態度にある。啓示、すなわち、クルアーン（コーラン）の言葉、から直接的であれ間接的であれ引き出すことのできるメッセージに基づいて自らの思索や実践を展開すること、これがイスラーム性の実質である。このような観点からムスリムの様々な営為、特に知的営為、を捉え直してみたい。	東京大学 名誉教授 鎌田　繁
9月21日(水)	**第2回 対立と共存の思想史：イスラームの「正統」と「異端」** IS台頭以降の中東では、ISが他宗教・他宗派に対して過酷な対応をとる一方で、イランとサウジアラビアなどの国家対立が宗派的な分断と認識されることが増え、スンナ派とシーア派の対立が政治的、社会的な大問題として捉えられるようになった。本講義においては、まずは異端や異教という概念がイスラーム思想においてどのように位置づけられるのかを整理し、攻撃の対象となりがちなシーア派系少数派について紹介する。その後、サラフ主義の源流となる存在であり、シーア派に否定的な現代サラフ主義者によってしばしば参照されるイブン・タイミーヤ（1328年没）に注目しつつ、スンナ派の側から見たシーア派認識について考察する予定である。	東京大学 文学部・大学院 人文社会系研究科 准教授 菊地 達也
10月5日(水)	**第3回 聖なる血統：世界に広がる預言者ムハンマドの一族** イスラームの歴史を紐解くと、人類が生みだしてきた他のあらゆる「真理」についてもしばしば見られるように、自分（たち）だけがその「真理」を理解し体現しているのだという主張を、実に多様な人々が、実に多様な根拠にもとづいて、行ってきたことが見てとれる。預言者ムハンマドとの血統的な繋がりも、そうした根拠の一つに数えられる。本講義では、現在では世界各地に（少なくとも）数千万の単位で生活していると考えられる預言者一族の姿を通して、イスラームという一つの「真理」をめぐって展開してきた人間の営みの一端を考えてみたい。	東京大学 東洋文化研究所 准教授 森本 一夫
10月12日(水)	**第4回 宗教復興のダイナミズム：近現代中央アジアの政治と宗教** 19世紀の半ば以降、中央アジアはまさに激動の近現代を経験し、その過程で主要な宗教であるイスラームもまた転変にみちた展開をたどることになった。それは帝政ロシアという異教徒の統治下にあっても自立性を維持し、イスラーム世界の盟主であったオスマン帝国のスルタン＝カリフへの敬慕を表明することすらできた。しかし、1917年のロシア革命で成立したソヴィエト政権は、無神論を掲げてイスラームに対する抑圧を強化した。それにもかかわらず、イスラームは強靭な耐性を発揮し、ペレストロイカ以降はイスラームの復興が進展した。ただし、グローバル化した現代世界の中で復興の方向性も多様化し、さまざまな潮流が生まれている。このような宗教復興のダイナミズムは、現代のイスラームの動向を考える上でも示唆を与えてくれるだろう。	東京大学 名誉教授 東京外国語大学 大学院総合国際学 研究院 特任教授 小松 久男
10月19日(水)	**第5回「イスラーム国」の衝撃：終末論とジハード** 2014年にイラクとシリアの広範囲に領域支配を及ぼした「イスラーム国」の思想的・政治的な根拠を解読する。「イスラーム国」の思想の神学的な根拠を構成する終末論と、法学的な根拠となるジハード思想について、イスラーム教の典拠的テキストの淵源と、近代における再解釈・発展の歴史を解説する。そのうえで、20世紀の国際政治の中でのグローバル・ジハード運動の展開に「イスラーム国」の前史を辿り、2011年以後のアラブ諸国の政治変動が提供した政治的環境条件を検討して、「イスラーム国」の現状と将来を展望する。	東京大学 先端科学技術 研究センター 准教授 池内　恵
10月26日(水)	**第6回 イスラーム経済から資本主義の未来を読み解く** 金融危機、地球温暖化、経済格差の拡大、貧困・低開発――山積する課題に直面している私たちの資本主義は、今、岐路にさしかかっている。そのような中、新たな経済のうねりが、イスラーム世界から押し寄せてきている。それが、イスラーム経済の実践である。イスラーム経済は、信仰が出発点になっているものの、そこで掲げられている経済ビジョン（これを「イスラーム経済知」と呼んでみたい）は、私たちとは全く相容れないものではなく、むしろ、よりよい地球社会の未来を私たちが構想するための有力なアイデアを提供しうるものである。本講義では、現代イスラーム経済の具体的な実践（イスラーム金融、ハラール製品、伝統イスラーム制度の再興）を紹介しながら、それらを支えるイスラーム経済知の核心に迫り、私たちがそこから何を学ぶことができるのかを受講者とともに考えてみたい。	京都大学大学院 アジア・アフリカ 地域研究研究科 准教授 長岡 慎介
11月2日(水)	**第7回 湾岸産油国のサバイバル：ポスト石油時代と開発戦略** 原油価格の暴落で石油収入が大幅に減少し、油価の回復は当面難しいとの認識が強まる中で、サウジアラビアをはじめとした湾岸産油国は石油に頼らない国づくりへの取り組みを強めている。油価下落に加えてシェールオイルなど新しい競争相手の登場、地球温暖化問題、電気自動車の開発などで湾岸からの石油輸出の将来に厳しさが増している。経済的にも政治的にも石油収入に依存してきたサウジアラビアなどの湾岸産油国は、サバイバルを目指して開発戦略を模索中である。しかし、転換はたやすいことではなく、無理に転換すれば経済、そして政治にとって大きなリスク要因となる。本講義では、サウジアラビアを中心にしてポスト石油時代へ向けた開発戦略とその問題点を検討する。	アジア経済研究所 新領域研究センター 上席主任調査研究員 福田 安志
11月9日(水)	**第8回 イスラームとジェンダー：湾岸地域を中心に** 湾岸地域の女性は、行動の自由への制限や服装規定から、差別や抑圧の犠牲者として描かれがちである。だが湾岸地域では女性を取り巻く環境が大きく変化している。2000年代以降の湾岸諸国では、男性よりも多くの女性が大学に進学するようになり、女性を主な消費対象者とする女性起業家も多く出現している。女性たちは教育、起業、消費などの分野で存在感を高めているのだが、彼女らにとって「イスラーム」的な価値観と調和的に生きるとはどういうことなのだろうか。また顕在化するシングル女性の存在や家庭内での男女の権力関係の変化をどのように理解すべきだろうか。本講義では、サウジアラビアを中心とする湾岸諸国における女性の教育、就労、消費と生活スタイルの変化に着目し、イスラームとジェンダーの問題を検討する。	東京大学大学院 総合文化研究科 特任准教授 辻上 奈美江
11月16日(水)	**第9回 変容する宗教文化：聖典解釈とムスリム・ファッション** 1970年代以降、「イスラーム復興」や「イスラーム主義運動」と呼ばれる動きが世界で注目をあびる中、ファッションやライフスタイル、行動様式に一定の傾向が見られるようになった。こうした状況は、しばしば、社会や文化の「イスラーム化」と呼ばれ、一方で警戒され、一方で歓迎されたのだが、本講義では、この現代的現象を、より大きな宗教文化のダイナミズムの中に位置づけることを目指す。その際、着目するのは、男性の長衣やひげ、女性のヴェールといった「ムスリム・ファッション」である。それらがいつから、どのような根拠や論理によって用いられてきたのか、今後、どのように変わっていくのか、あるいは変わらないのかを、現代の聖典解釈に関する基礎的知識を ふまえつつ、考えていきたい。	東京大学 日本・アジアに関する 教育研究ネットワーク 特任准教授 東洋文化研究所 准教授 後藤 絵美
11月24日(水)	**第10回 現代イスラームの社会地図：アラブ革命の五年間を振り返って** 2011年に始まったアラブ革命は、軍事クーデタや内戦、過激派の跳梁や大量難民の発生など、総じて暗転の経緯をたどった。しかし、この混迷とも形容される状況の中から明らかになったことも多い。革命の過程を通じて、宗教的な権威と国家との関係が問い直され、イスラーム体制の建設を目指す運動の力量も試された。イスラームをめぐる国家と社会の関係は現在、どのように変化しつつあるのか。本講座の全体を総括しながら、現代イスラームの社会地図を描くための議論の素材を提供したい。	東京大学 東洋文化研究所 教授 長沢 栄治

※講師ならびに講座内容は変更される場合があります。ご了承ください。